平成14年度

コア科目　総合コース

お茶の水女子大学
平成
29.2.22
受贈
附属図書館

# 「メディアとコミュニケーション」

（02前）

お茶の水女子大学

総 合 コ ー ス

「メディアとコミュニケーション」(02前)

総合コースは、共通な一つの主題について、研究分野の異なる複数の教官が講義するもので、総合的な視野から学ぶものである。

テーマの概 要 ;

現在、メディアは人間の追随を不可能にするかの速度で発達しており、それに伴い、コミュニケーションのありかたも転機を迎えている。

そこで、本講義では一旦たちどまり、コミュニケーションを「一方向もしくは双方向の情報伝達」、メディアを「コミュニケーションの媒介手段」と定義し、メディアの物理的実現方法や歴史を考え、また、人間同士もしくは人間以外の情報交換のありかたについて考察する。

そして、上記の知識をふまえ、メディアとコミュニケーションのこれまでと今後とに対する識見を得ることを目的とする。

対 象 学 年 ;1年〜4年

履 修 単 位 数 ;2単位

※ 複数のテーマを履修した場合、卒業までに1年生は計4単位、2〜4年生は計8単位認められる。

試 験 方 法 ;試験はレポートにより行う。

課題は二題 (A)テーマを通じての課題 (B)個別課題

(詳細については、別途指示する)

☞出 題 日 7月17日(水)

(学生は指示に従ってレポートを作成し、この巻末の表紙を添付のうえ、締切日までに学務課教務係へ提出すること。)

☞締 切 日 9月20日(金) 17時

セ ミ ナ ー ;講義担当講師との質疑応答を中心とした「セミナー」を行う。

履修する学生は必ず出席すること。

☞ 7月17日(水)

参 考 文 献 ;参考文献には、なるべく附属図書館にあるもの、あるいは入手可能なものをあげた。

## 「メディアとコミュニケーション」(02前)講義日程

開講日時:水曜日5・6時限 13:20〜14:50 (共通講義棟2号館201)

| 月　日 | 担当講師等 | テーマ |
|---|---|---|
| 4月17日 | 文教育学部 古田 啓 助教授 | オリエンテーション |
| 4月24日 | 大学院人間文化研究科 坂元 章 助教授 | インターネットの光と影 ー心理学の観点からー |
| 5月 1日 | 理学部 吉田 裕亮 助教授 | 「情報」=「真実」+「雑音」 |
| 5月 8日 | 生活科学部 伊藤 亜矢子 講師 | 学級風土アセスメントにみる教師と生徒のコミュニケーションギャップ |
| 5月15日 | 文教育学部 浅田 徹 助教授 | 和歌によるコミュニケーション |
| 5月22日 | 文教育学部 相原 茂 教授 | 日本の漢字・中国の漢字 |
| 5月29日 | 理学部 最上 善広 教授 | 細胞どうしのコミュニケーション ー単細胞から多細胞へー |
| 6月 5日 | 生活環境研究センター 冨永 典子 教授 | 植物の体内における情報伝達と外に対する情報発信 |
| 6月12日 | 生活科学部 柴坂 寿子 講師 | 子ども同士のコミュニケーション |
| 6月19日 | 生活科学部 宮田 敬一 教授 | 家族内のコミュニケーション連鎖 |
| 6月26日 | 理学部 堀 佳也子 教授 | より軽くより薄く、省エネ時代の働き者:液晶ってどんなもの? |
| 7月 3日 | 大学院人間文化研究科 坂元 章 助教授 | メディアとサブリミナル効果 ー無意識における影響ー |
| 7月10日 | 文教育学部 古田 啓 助教授 | 前島密の夢--メディア発達小史 |
| 7月17日 | | セミナー |
| 7月24日 | | 予備日 |

「メディアとコミュニケーション」第1講

### インターネットの光と影 ー心理学の観点からー

大学院人間文化研究科 坂元 章 助教授

近年、インターネットは急速に普及し、多くの人々にとって必要不可欠なものになっている。受講者の中にも、毎日、インターネットを使って、情報を得たり、人とコミュニケーションしている人も少なくないであろう。そして、こうしたインターネットの普及に伴い、その功罪について盛んな議論があることも、多くの人々が知っているところであろう。

今回の授業では、そうしたインターネットの光と影について、それに関する心理学的な研究の実状を概説する。例えば、以下のようなトピックがある。

1) インターネットを使った教育は有効か?
2) インターネットを使ったカウンセリングは有効か?
3) インターネットを使った会議は有効か?
4) インターネットを使うと、社会的不適応や中毒になるのか?
5) インターネットは犯罪や差別を助長するのか?

いずれも、世間で、インターネットの効果や影響の問題として、期待や懸念が見られているトピックである。これらを扱った心理学の実証研究には、世間で言われているような期待や懸念を肯定するものも、否定するものもあり、単純ではない。実証研究の知見は一般には必ずしも知られてはいない。授業時間内には、すべてのトピックについては十分に話せないかもしれないが、大まかなところは伝えたいと考えている。

インターネットには、影の部分が確かにある。しかし、だからと言って、インターネットに始めから背を向けてしまうのは得策ではない。背を向けることによって、光の部分、すなわち、インターネットから受ける恩恵も失われてしまうからである。

重要なのは、インターネットの光の部分をより輝かせ、その恩恵をより十分に享受するとともに、影の部分を克服することである。そのためには、インターネットの光と影に対する地道な実証研究が必要なのである。

参考文献

坂元 章 (編) 2000 インターネットの心理学 ー教育・臨床・組織における利用のためにー 学文社 全181 p.

## 「情報」＝「真実」＋「雑音」

理学部　　吉田　裕亮　助教授

１９４８年アメリカのベル電話研究所のクロード・シャノン(Claude E. Shannon)は、通信の符号化問題の研究で情報量と言う概念が数学的に明解に定義可能であること、そして、その単位として同時に確からしい２つの事柄から、その内のひとつを１回選択するときに伝えられる情報量を用いるべきであることを示した。いわゆる情報量の単位、ビットである。さらに、シャノンは、通信系は情報源と受信者が通信路（チャンネル）という媒体を介して結びついているという、とてもシンプルでかつ応用の広い概念を与えた。今日の情報理論は、このシャノンによる通信系の数理モデルに関する一連の研究論文から始まると言っても過言ではない。シャノンの通信モデルは以下のようなモデルである。

情報源 —> 符号器 —> 通信路 —> 復号器 —> 受信者
↑
雑 音

この図を見ると、いかにも電話会社の研究者が考えたモデルのように思われるかも知れない。すなわち、話者と聴者が電話器を通して音声を電気信号に変えて電話線を通して情報を伝達するということが見て取れるであろう。しかし、このシンプルなモデルはシンプルが故に、殆ど全ての情報伝達系に応用することが可能である。ラジオやテレビ等の電磁波による無線通信や光ファイバーによるデジタル通信はもちろん、人と人の会話、生体内の神経伝達機構なども表現できる。さらには、実験を行ってデータを得ることや、自然現象や社会現象を観測することにも、このモデルを適用することが可能である。このモデルの重要な点は、通信路には、一般に雑音が加わっている点にある。すなわち、我々が得ている情報や観測結果には常に真実と同時に雑音が混入しているということを認識する必要があろう。この講義では、「如何に雑音に立ち向かうか」、あるいは雑音が除けないなら、「如何に雑音と付き合うか」を具体的な例と共に考えて行きたい。

参考文献

ノーバート・ウィーナー著
「サイバネテックス（第２版）」－動物と機械における制御と通信－岩波書店（1962）



## 学級風土アセスメントにみる教師と生徒のコミュニケーションギャップ

生活科学部　　伊藤　亜矢子　講師

学級風土（classroom climate）は、簡単に言えば「学級の性格」である。欧米の研究では、生徒が感じている学級風土と、教師の感じているそれとは、かなりの差異（ギャップ）があると指摘されている。

ところで、スクールカウンセラーの役割の１つは、教師と協働しながら、学校や学級そのものをより好ましいものへと変化させ援助的な機能を高めることにある。スクールカウンセラーの持つ臨床心理学的な視点から、学級風土を捉えると、教師の実感とは異なる姿が現れたり、生徒が感じている学級風土を教師に伝えることで、教師自身の中に、学級を捉える新たな視点が生じたりする。

授業では、実際のデータを示しながら、質問紙による学級風土アセスメント結果にみる教師－生徒関係や、教師と生徒のコミュニケーションギャップについて検討する。

学級風土アセスメントの結果は、必ずしも教師にとって意外なものではなく、多くの場合、教師自身の実感とも一致するものである。しかし、学級風土アセスメント結果を媒体として教師とカウンセラー（コンサルタント）が学級について話し合うコンサルテーションを行ってみると、生徒と教師が同じように学級風土を感じていても、それに対する意味づけが両者で異なるなど、微妙な立場の違いがしばしば浮き彫りになる。

高校時代まで生徒として学級を体験してきた受講生には、質問紙が捉えた学級風土という新たな角度からの客観的資料にふれることで、教師の視点やカウンセラーの視点を追体験してもらいたい。それにより、学級生活という日常体験を、研究面から捉え直すことの面白さや、研究成果を現場に還元することの面白さに触れてほしいと考えている。

参考文献

臨床心理士のスクールカウンセリング③全国の活動の実際　村山正治・山本和郎編　誠信書房　1998
心理学におけるフィールド研究の現場　尾見康博・伊藤哲司編　北大路書房 2001
21 世紀を生き抜く学級担任①崩壊を防ぐ学級づくり　無藤隆・澤本和子・寺崎千秋編　ぎょうせい　2001

# 和歌によるコミュニケーション

文教育学部　　浅田　徹　助教授

コミュニケーションが「情報を効率よく正確に伝えること」を目標にすると考えるなら、和歌をメディアに選ぶなど愚かしいことに違いない。伝達できる情報量も小さいし、正確に伝わってくれるとも限らない。危急のときに和歌で助けを求める人はいないし、商談を和歌でとり結ぶ人もないだろう。それなら、なぜそんなメディアが栄えたのだろう。

バレンタインデーに贈られるチョコレートは、「好きだ」という情報を伝達しているだけではない。チョコレートを贈るのは一つの表現行為だ。どんなチョコを選び、どんなリボンを掛け、どんなカードに何色のペンでメッセージを書くか？　そこには、決められた「正解」もないし、「伝達効率」の計算もできない芸術的創造行為がある。それは、「好きだ」という情報の<外側>にある「余計なこと」では決してない。表現する行為や、それを受け取る鑑賞行為から切り離された、抽象的な「情報」など実際には存在しないのだ。あるいは、「心をこめて」作った料理を、相手に「おいしい」と思ってもらえたら、何かが「伝わった」と感じないだろうか？　これがコミュニケーションでないはずはないが、まさか「この料理はおいしい」という情報が伝達されたわけではないだろう。コミュニケーションは「情報の伝達」という側面からでは測ることができないのだ。

さて、言葉自体が贈り物になるとしたら、どうだろうか？

清少納言の知り合いであった藤原公任は和歌の名手で、清少納言の歌の才能を試験しようとした話が枕草子にも残っている。彼には、和歌の良し悪しについて論じた『新撰髄脳』という小さな作品がある。同書には、（１）和歌は心が深いのが良く、（２）姿が整っているべきで、（３）さらに何か「あっ、なるほど」と思わせるうまいところがあるのを理想とする、と述べられている。もし、言いたい事柄（情報）を伝えるのが和歌の第一目的だったら、（２）や（３）は必要ないだろう。だが、贈り物の条件としてこれを読み替えたらどうだろうか。相手への深い気持ちがこめられていて、美しい（おいしい）物体であり、何か自分なりのおもしろい工夫やアレンジが加えられている贈り物は確かに理想だろう。歌がどのような贈り物として機能したかを様々な実例によって紹介したい。

参考文献

新日本古典文学大系『後撰和歌集』　岩波書店

分からない事項は『和歌大辞典』（明治書院）参照のこと。いろいろな歌集の原文は『新編国歌大観』（角川書店、全十巻）で見ることができる。



# 日本の漢字・中国の漢字

文教育学部　　相原　茂　教授

日中両国とも漢字を用いて、それぞれの言語を表記しているが、同じところ違うところ少なくない。

漢字そのものが違う。日本にはひらがな、カタカナもあるが中国は漢字のみである。

日中同形異義語と呼ばれるものもある。例えば“湯”は中国語では「スープ」の意味だ。

日本と中国の２カ国語の間でよく起こる誤解や笑い話など、日中異文化ディスコミュニケーションの話題をとりあげる。

参考文献

高島俊男『漢字と日本人』（文春新書）
相原茂『雨がホワホワ』（現代書館）

## 細胞どうしのコミュニケーションー単細胞から多細胞へー

理学部　最上　善広　教授

コミュニケーションが調和を生み出すための手段であるとしたら、生命現象はまさにコミュニケーションで維持されているということができよう。我々の身体を考えてみるとわかるように、生き物は多くの機能的なパーツからできている。口は食べ物を取り入れ、胃や腸はそれを消化吸収する。筋肉は得られたエネルギーを消費し、それによって手足が動き、我々は動き回ることができる。これらの機能的なパーツが合目的的な調和を持って活動しているのが生き物であると言うことができる。この調和のもとには、パーツ間のコミュニケーションがあるはずである。

生命活動が持っている、調和を保つためのコミュニケーションの場をどこまで細かく見て行くことができるだろうか。生命の持つ階層性を、個体→器官→組織→細胞→オルガネラ→生体分子、と下っていくと、細胞の階層がひとつの境目となろう。解剖したカエルから取り出した心臓は長いこと自発的に拍動を続ける能力を持っているように、生体を作るパーツそのものは単体でも機能を果たしうる。臓器移植が可能なのは、各臓器がこのような自立性を持っていることに依存している。そしてこの自立性は、臓器を作るさらなるパーツー細胞ーどうしのコミュニケーションが取り持つ調和のもとに成立しているのである。

細胞は生命活動の基本単位であり、それ自身が内部に調和を作り出すためのコミュニケーションを展開しているのであるが、ここでは細胞どうしのコミュニケーションに注目する。細胞間のコミュニケーションの問題は、単細胞から多細胞への、大きな進化のステップを論じることにも繋がる。

まず取りあげるのは、単細胞の生き物（バクテリアや原生生物）であり、これらの間に見られるコミュニケーションはどのようなものなのか。次いで、単細胞と多細胞の狭間に生きる、粘菌という奇妙な生き物のライフサイクルに見られる細胞どうしのコミュニケーションの発生を見てみる。

これらを通して、細胞どおしの調和の上に成り立っている生命活動と、それを作り出すコミュニケーションについて話を広げていきたい。

参考文献

ミクロコスモス（L．マルグリス、D．セーガン）科学のとびら８，東京化学同人
単細胞動物の行動（内藤　豊）UP BIOLOGY 東京大学出版会



## 植物の体内における情報伝達と外に対する情報発信

生活環境研究センター　冨永　典子　教授

植物は動物のように動けないので、周りが自分にとって都合の悪い状況になっても逃げることができないし、子孫繁栄のためによい場所に移動するなどということもできない。そこで生き残りのためにいろいろな戦略を進化させてきた。

今回の講義では、まず植物体内の情報伝達の例として、植物ホルモンのアブシジン酸の移動を取り上げる。アブシジン酸は高校の生物でも教わったと思うが、気孔の開閉に関与するホルモンである。これは植物の根や葉で、そして土壌中ではカビによって合成され、土壌↔根と自由に移動でき、また、植物体内を木部、師部の両方を通って速やかに移動できる。そして異なった組織への分布は主に pH によって決まるらしい。アブシジン酸は根の周りの土が水分不足になった時、大気中の水分が少なくなった時などに葉や根で合成されるが、どのようにどこまで移動し、どのような働きをするかということについて述べる。

次に、植物体の外に対する情報発信の例として、種子植物の繁殖器官である花の形について述べる。種子植物は、近親交配を避けるため、自分とは違うタイプの遺伝子を持つ花粉を選ぶ仕組みを持っている。植物は動けないので、他個体との交配を実現するためには花粉媒介者（主に昆虫）を必要とする。従って、花は繁殖器官であると同時に、花粉媒介者を誘う器官でもあり、より効率的に誘うよう進化してきた。例えば、昆虫に花粉を他個体に運んで欲しいが、花や花粉を食べられてはコストがかかるので、昆虫ができるだけ集めにくい位置に花粉をつけるように花の形が進化し、そして高い位置を飛ぶ外敵には見えにくく、地面近くを飛ぶハナバチにはよくみえるように横向き、下向きの咲き方が進化したと考えられる。また、株への花粉媒介昆虫の訪問数は多い方が植物にとって有利だが、一方、株に訪問して他個体の花粉を持ち込んだあとはできるだけ速やかに他の株に移動するよう、花が一度に咲かず、少しずつ咲いたり、花がいくつかまとまってつく花序という構造を取ったりするように進化したと考えられる。

参考文献

種生物学会編「花生態学の最前線　美しさの進化的背景を探る」　文一総合出版
水野一晴編「植生環境学ー植物の生育環境の謎を解くー」　古今書院
（もっとマクロな植物間の相互関係についての本）

「メディアとコミュニケーション」第８講

## 子ども同士のコミュニケーション

生活科学部　　柴坂　寿子　講師

本講義では保育園・幼稚園での子ども同士のコミュニケーションを通して、人のコミュニケーションについて考えていく。

園での子ども同士のコミュニケーションは少なくとも２つの特徴を持っている。ひとつは、多くの園ではクラス集団が生活の中心にあることから、同じ子ども達が繰り返して出会う場でのコミュニケーションだということである。どのような子どもなのかがある程度分かっている相手、園についての様々な知識や、クラス集団での多くの出来事を共有する相手とのコミュニケーションである。

もうひとつは、コミュニケーションが直接的な対面的なコミュニケーションであることだ。現代の子ども達の生活には電話やコンピュータは当たり前のように入り込んでいる。しかし、園での子ども同士でのコミュニケーションは、相手と面と向かってのコミュニケーションである。話し合ったり、一緒に笑ったり、ときにはぶったり泣いたり・・。それが園での子ども同士のコミュニケーションの形である。

子どもという「異文化」でのコミュニケーションに触れながら、自分たち自身のコミュニケーションについても考えてもらえればと思っている。

参考文献

身体の人類学　菅原和孝　(1993)　河出書房新社
ヒューマン・エソロジー　アイブル＝アイベスフェルト，I.　(2001)　ミネルヴァ書房

「メディアとコミュニケーション」第９講

## 家族内のコミュニケーション連鎖

生活科学部　　宮田　敬一　教授

日常の家族生活の中で、たいていの家族は多少の困難があっても、成員は協力しあい、その困難を乗り切っている。そして、うまく、次の家族ライフサイクルへと移行していく。しかし、不幸にもその困難が問題へと発展し、他者に問題解決の援助を求めてやってくる家族もいる。問題を維持し、その泥沼から脱出できない家族のコミュニケーションには、なにか特徴があるのだろうか。講義では、精神分裂病を作り出す母親のコミュニケーションとして歴史的に有名なダブルバインド（二重拘束）仮説を通して、家族病理の考え方を概観する。次いで、日常の困難から問題へと発展し、それを維持している組織的な家族内のコミュニケーション連鎖の見方を提示する。そして、最後に、健全な家族内のコミュニケーションのあり方を考察する。その際、家族コミュニケーションに内在するパワー、家族神話についても言及する。
講義は次のような流れにそってなされる。

1）　精神分裂病を作り出す可能性の一つとしての二重拘束
2）　家族の発達とコミュニケーション
3）　問題を抱える家族内のコミュニケーション連鎖
4）　コミュニケーションと家族の階層
5）　健全な家族コミュニケーションのあり方とは？

参考文献

家族療法　　ヘイリー著　川島書店
魔女ランダ考　中村雄二郎著　岩波書店

## より軽くより薄く、省エネ時代の働き者：液晶ってどんなもの？

理学部　　堀　佳也子　教授

携帯電話やパソコンの画面などでおなじみの液晶表示装置であるが、あの小さいところで、どんな仕組みで、精細な画面が構成されているのだろうか。そもそも液晶ってなんだろうか。そんな疑問をもったことはないだろうか。

物質の三態ということを習ったと思う。どんな物質も、温度や圧力などの外部条件によって、固体、液体、気体とその状態を変える。たとえば、雪や氷、流れる水、そして目には見えない水蒸気。固体の多くは結晶で、分子やイオンなどの構成粒子がきっちりと配列していて、方解石やグラファイトのように、一般には方向によって性質が違う。このことを異方性という。液体では、粒子は互いに接触しあっているが、かなり自由に動けるので方円の器に随う。気体では粒子間の距離が大きく、粒子間引力が小さいので、密閉容器に入れておかないと雲散霧消してしまう。

液晶とは、液体と結晶の中間的な存在であり、流動性があるという点では液体に近く、異方性があるという点では結晶に似ている。それで液体と結晶の字を１つずつとって液晶という。液晶は、最初（1888 年）、オーストリアの植物学者によって発見され、ドイツの物理学者によって fliessende Kristalle、流れる結晶と命名された。英語では Liquid Crystal である。まさに中間的な存在であることをよく表している。

液晶の働きも、この中間的な特質に依っている。満員電車の中を思い浮かべてほしい。身動きできないほど、ギュウギュウではどうしようもないが、多少動ける場合、急ブレーキなどちょっとしたことで、ドドッと将棋倒しになったりする。この性質が、小さな電圧で分子配列を制御することを可能にし、液晶デイスプレイに使われている。

今や、液晶は、われわれのコミュニケーションに欠かすことのできない材料であるが、液晶分子自身が、分子間相互作用つまり分子同士のコミュニケーションによって、液晶と一口に言っても実に様々な集合状態を形成する。

また、液晶研究は、純粋学問と産業間の、あるいは、物理・化学・生物等、学問分野間の、さらに国際的なコミュニケーションを通して発展してきた。そんなことにも触れてみたい。

参考文献

岩柳茂夫『液晶』化学 One Point 10　共立出版
竹添秀男『液晶のつくる世界　画像をかえた素材』10 代の教養図書館 25　ポプラ社



## メディアとサブリミナル効果　－無意識における影響－

大学院人間文化研究科　坂元　章　助教授

われわれは、自分が全く気がつかなかったような映像や音声からでも、無意識のうちに影響を受けることがある。これがサブリミナル効果である。テレビなどのメディアでもしばしば、こうした効果を狙ったと思われる映像や音声が流され、話題になっているので、サブリミナル効果について知っている人も少なくないであろう。

サブリミナル効果の威力は強大であり、これをうまく使えば、相手に気づかれないままに、相手を自由に操ることも可能であると信じている人たちもいる。しかし、一方で、これを全く信じていない人たちもいる。認識には少なからず開きがある。

実は、サブリミナル効果は、学術的な心理学の研究対象として古くから関心が持たれ、多岐にわたる研究によって、ある程度の知見が蓄積されているものである。

しかし、こうした知見はまだあまり知られていない。そこで、今回の講義では、それらの知見を解説し、実際のところ、学術的な観点からは、サブリミナル効果の真偽をどのように考えるべきかという問題ついて論じたい。具体的には、次のトピックについて順に解説する予定である。

1）サブリミナル効果とは何か
2）サブリミナル効果をめぐる社会問題
3）サブリミナル効果に関する心理学の実証研究
4）サブリミナル効果は存在するか
5）サブリミナル効果とどう付き合うか

サブリミナル効果は、強力で警戒すべきものなのか、それとも、とるに足らないものなのか、私なりの一応の答えを出すつもりである。受講者にとって、思っていた通りの答えであろうか、それとも、意外な答えであろうか。

参考文献

坂元章他（編）1999　サブリミナル効果の科学　－無意識の世界では何が起こっているか－
学文社　全 186 p.

# 前島密の夢 --メディア発達小史

文教育学部　　古田　啓　助教授

前島密は郵便制度の父として知られている。同時に、国語国字問題の開始である「漢字御廃止之議」を建議した人でもあった。

この２つの業績は無関係ではない。日本全国という単位で考えたとき、郵便というメディアの確率は必然であった。ところが、江戸時代までの手紙の文体は候文体であった。郵便制度が出来たとしても、漢字の読み書き、そして候文という鎌倉時代にさかのぼる古い文体が使いこなせないと国民同士の手紙のやりとりは出来ない。

そこで彼は、教育の向上のためにも、漢字廃止を建議し、文体は当時の武士の話し言葉であるデゴザル体を唱えたのであった。

明治維新後、郵便制度は彼の提唱のもとに行われた。そもそも「郵便」「切手」「はがき」という語も彼によるという。

一方、漢字の問題と文体の問題は簡単には解決せず、明治３０年代における漢字仮名交じり文の口語文体が成立して、一応の決着を見たといえる。

本講義では、前島密という一人の先覚者が提起した問題が、メディア・コミュニケーション・教育という分野にわたっていかにして明治時代の日本人の言語生活を変革していったかを中心におっていく。

平成１４年度

# コア科目

## 総合科目　総合コース

## 「メディアとコミュニケーション」

＊提出期限９／２０（金）１７：００

（A）テーマを通じての課題

| | |
|---|---|
| 課　題 | |

（B）個別課題　教官名〔　　〕

| | |
|---|---|
| 課　題 | |

| | | | |
|---|---|---|---|
| 学年氏名 | | | 学籍番号 |
| 学年 | 学部 | 学科 | 講座・専攻 |

お茶の水女子大学

総合コース小論文　　学籍番号（　　）

| 学部 | 学科 | 講座・専攻 | 学年 | 氏名 | |
|---|---|---|---|---|---|
| 月　日 | 課題 | | 担当講師名 | | |

総合コース小論文　　学籍番号（　　）

| 学部 | 学科 | 講座・専攻 | 学年 | 氏名 | |
|---|---|---|---|---|---|
| 月　日 | 課題 | | 担当講師名 | | |

総合コース小論文　　学籍番号（　　）

| 学部 | 学科 | 講座・専攻 | 学年 | 氏名 | |
|---|---|---|---|---|---|
| 月　日 | 課題 | | | 担当講師名 | |

総合コース小論文　　学籍番号（　　）

| 学部 | 学科 | 講座・専攻 | 学年 | 氏名 | |
|---|---|---|---|---|---|
| 月　日 | 課題 | | | 担当講師名 | |

総合コース小論文　　学籍番号（　　）

| 学部 | 学科 | 講座・専攻 | 学年 | 氏名 | |
|---|---|---|---|---|---|
| 月　日 | 課題 | | | 担当講師名 | |

総合コース小論文　　学籍番号（　　）

| 学部 | 学科 | 講座・専攻 | 学年 | 氏名 | |
|---|---|---|---|---|---|
| 月　日 | 課題 | | | 担当講師名 | |

総合コース小論文　　学籍番号（　　）

| 学部 | 学科 | 講座・専攻 | 学年 | 氏名 | |
|---|---|---|---|---|---|
| 月　日 | 課題 | | | 担当講師名 | |

総合コース小論文　　学籍番号（　　）

| 学部 | 学科 | 講座・専攻 | 学年 | 氏名 | |
|---|---|---|---|---|---|
| 月　日 | 課題 | | | 担当講師名 | |

総合コース小論文　　学籍番号（　　）

| 学部 | 学科 | 講座・専攻 | 学年 | 氏名 | |
|---|---|---|---|---|---|
| 月　日 | 課題 | | | 担当講師名 | |

総合コース小論文　　学籍番号（　　）

| 学部 | 学科 | 講座・専攻 | 学年 | 氏名 | |
|---|---|---|---|---|---|
| 月　日 | 課題 | | | 担当講師名 | |

総合コース小論文　　学籍番号（　　）

| 学部 | 学科 | 講座・専攻 | 学年 | 氏名 | |
|---|---|---|---|---|---|
| 月　日 | 課題 | | | 担当講師名 | |

総合コース小論文　　学籍番号（　　）

| 学部 | 学科 | 講座・専攻 | 学年 | 氏名 | |
|---|---|---|---|---|---|
| 月　日 | 課題 | | | 担当講師名 | |

総合コース小論文　　学籍番号（　　）

| | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|
| 学部 | 学科 | 講座・専攻 | 学年 | 氏名 | |
| 月　日 | 実施 | | | 担当講師名 | |

総合コース小論文　　学籍番号（　　）

| | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|
| 学部 | 学科 | 講座・専攻 | 学年 | 氏名 | |
| 月　日 | 実施 | | | 担当講師名 | |